

トピックス
1. 播州日誌「勝利の女神」
2. 南国土佐を後にして 第1回



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 社会保険労務士・行政書士
 福留章

<h1>龍馬通信</h1>	No. 51
	2022年3月号

早春の季節

弥生、3月、早春の季節。出会いと別離の季節でもある。三寒四温。コロナ禍の中、例年にも増して春を待望する人は多い。陽だまりの中でとろとろと気持ちをなぐさめていると、遠い昔の事が思い出される。たくさんの人と出会い、たくさんの人と別離。いろいろな出会い、いろいろな別離。人生とは人と出会うための長い旅路。出会いには又別離がつきもの。その繰り返しが人生なのかもしれない。別離が厳しいものであればあるほど、その印象は生々しく記憶として残っている。意見の相違やちょっとした言葉の行き違いの事もある。初めからボタンの掛け違いであることも又、修復することなく掛け違いのままで去っていった人。

好きな人はたくさんいた。中学生の頃は母親の面影を色濃く宿していた人。高校生の頃は触れなば散らんといい風情の人。修学旅行で九州を旅した時、バスの後方の座席から数列、前の補助席の彼女がバスが揺れて隣の男子の体に触れる様子の疎ましかった事。宿を抜け出し、白菊温泉（地名は定かではない）の喫茶店でサン



ドイッチを食べた思い出。今でもその時の一挙手一投足が記憶としてしみ込んでいる。それ程、好きな彼女でも高卒で就職し、私が東京の大学へ行って2年目に「待ちきれない」といって他の人に嫁いでいった。恋愛の場合の別離はまだいい。きれいなままの思い出が残るから。

多くの人が出会い、別れる3月という季節。喜びと悲しみがまじり合う季節。そんな季節を愛おしく思う人は幸福な人であると思う。

啓蟄 3月5日 春分 3月21日

『龍馬と私』 ～ 蝦夷地開拓の夢 ～

「世界の海援隊でもやりますか。」新政府の要職のメンバー表に龍馬の名前がないことに西郷が気付き、質問したのに対して答えた龍馬の言葉。龍馬は初めから政府の要職にならぬと決めていたことは明らかでお龍の述懐の中にも出てくる。「一戦争済めば、山中に入って安楽に暮らす積もり。役人になるのは俺は否じゃ。退屈な時、聞きたいから月琴でも習っておけど…」龍馬の夢は海外雄飛であり、貿易であった。暗殺される4日前、彼は林謙三宛、次のような内容の手紙を書いている。それによれば龍馬は蝦夷地開拓を「一生の願い」とし何度となく挑戦しようとした。最初の計画は元治元年(1864年)土佐の北添信摩らと立案。しかし池田屋事件で新選組に北添らが斬殺され、

龍馬の手紙
 (慶応三年三月六日 長府藩士・印藤肇宛)

京都大学附属図書館所蔵 平尾道徳蔵 三宅本龍馬書 光復堂書店

小弟ハエゾ(蝦夷)に渡らんとせし頃より、新国を開き候ハ積年の思ひ一世の思ひ出に候間、何卒一人でなりともやり付申べくと存居申候。

挫折する。さらに慶応3年(1867年)春頃から薩摩の大極丸を借り、薩摩藩の林謙三(明治維新後も海軍にあって、のち海軍中将)を技術幹部として蝦夷地行きを計画。しかし船の借用料1万両の工面がつかず、そのうちに土佐藩が大極丸を買収してしまい海援隊の自由にならなくなり、2度目の挫折。手紙にはそのことを詫びるとともに海援隊を離れて幕府でも薩摩でも力の発揮できるところがあれば移籍に同意しますとの内容。それに対し、林から海援隊に残って時を待つという返事があり、龍馬は翌11日の手紙で林の決断に厚く礼を述べている。龍馬の夢は果てしなく、蝦夷地開拓をも考えていた。この手紙の4日後に龍馬は暗殺されてしまう。明治30年代、龍馬の甥、坂本直寛の時代になって北海道への移住が実現する。

播州日誌

「勝利の女神」



勝利の女神は本当に存在するのだろうか？鍛錬に鍛錬を重ねて満を持して競技に出る。あと少しという所でミスをする。転倒してしまう。勝利の女神はいたずら好きだ。人々は驚嘆の声をあげる。悔し涙にくれる選手達。羽生結弦選手は男子フィギアスケートの絶対王者だった。前人未踏の四回転半ジャンプに挑戦し続け、血のにじむような練習を繰り返した。左足首の痛みにも屈しなかった。そして期待された男子ショートプログラム。思いもよらぬ事が発生した。最初のジャンプが踏み切れずに空振り。氷の穴にはまったと試合後語ったその目には涙があった。結果8位。他の日本選手がめざましい活躍をする中、王者は奈落の底におとされたような状況だった。彼は何を考え何を思っていたのだろうか。素人の私達にはその胸中を図りかねない。辛い悲しい絶望の淵をさまよっていたのかも知れない。

3日後の男子フリー、彼の出番、悲愴な雰囲気会場を包む。8位からの巻き返しは誰もが困難だとわかっていた。勝利の女神は冷やかだった。暖かい救いの手を差し出しはしなかった。最初のジャンプで4回転半を失敗ししりもちをついた。しかし彼はひるむこともなく、最後まで舞い続けた。それは見事な演技であった。そして4回転半ジャンプが技として認められた。蒼白となった顔を両手で覆い隠すように心の苦痛に絶えていた。勝利の女神は微笑むことなく彼をつき離れた。しかし試合を見終わった観客達は知っていた。勝利の女神が彼に与えた試練はまだ伸び代があるから、激励の為に勝利させなかった事を。血のにじむような練習を繰り返すあなたの力を、次の機会にこそ、勝利の女神が微笑む事をみんなが待っている。頑張れ、羽生結弦選手。

彼は試合数日後のインタビューで語った。「報われない人生」を感じました。でも今「報われない人生」を生きている自分を幸福だと思っている。大観衆の熱烈な応援の声を聞きましたか。あなたは本当は報われているのです。十分に。挑戦し続けるあなたを世界中が見守っているのです。



2022. 2. 15

「雪上に、リンクに咲いた花」

北京での冬季五輪。コロナ禍の厳戒体制。光と影が交錯する中、17日間の熱き闘いの幕を閉じた。光は「スポーツの魅力」。アスリート達は死力を尽くして高く飛び、疾走し、雪上にリンクに、美しい感動の花を咲かせた。影は中国の人権問題、ロシアのウクライナ侵攻、環境への影響が懸念される人工雪。ジャッジの公平性、ドーピング問題。アスリートファーストからはかけ離れ、あからさまな国威発揚は「平和の祭典」の限界を露呈した。IOCバッハ会長は「五輪の結束する力は、分断する力より強い」と大会の成功をアピールした

が、余りにも負の面が印象として残ってしまう。そんな中、アスリート達は美しく輝いていた。勝者も敗者もお互いに祝福し激励し合った。18個のメダルを獲得した日本選手達の活躍に連日連夜感激し涙を流した。低温や強風、雪質の違和感、氷に好かれたり、嫌われたり。より高くより早くより美しく。選手達は競技した。勝利してメダルを得た人も、惜しくもメダルを逸した人も、全く歯がたたなかった人も、それぞれが美しく、それぞれがたくましく、まさに雪上に、リンク上に咲いた花。最年少、日本初、最多記録など色々な彩がついて輝く笑顔、抱き合う仲間。失敗しても大技に挑戦したものには惜しめない拍手と賞讃。スポーツの魅力が力となって人々と喜びを共有する。最終日、カーリング決勝。大差で敗れたものの日本女子チームの大健闘はマイナーな競技を小さな日本人でも欧米と十分に闘い得るメジャースポーツに押し上げた。負の面の清算はすんでいない。後の歴史が解決をはかるだろう。それはそうとして中国の人達がボランティアで大会運営を支え、最後までやり通りした事を私達は記憶しなければならない。心からの拍手を贈りたいと思う。



2022. 2. 20

～南国土佐を後にして～

第1回 「父と母のこと」

私には2つの故郷がある。小学校3年生の夏休みまでとその後と。生まれ故郷は神戸。昭和23年3月1日神戸市長田区若松町に生まれる。昭和23年はうるう年で2月29日潤日が本当の誕生日。そうであることを、小学校の高学年になってから母から打ち明けられた。当時の出生届もいい加減なもので、4年に1度の誕生日では可哀想と言うことで翌日の3月1日出生として届けられたのだ。誕生月の占いの場合2月生まれで見るのか、3月生まれで見るのか今も未解決のままている。両方の月の内容を見てよい方を運勢として見ている。ずいぶん大人になってからも潤日生まれについて何か特別なものがあるような錯覚をしていた。ある日、東加古川の Snackbar で飲んでいて誕生日の話になって、たまたま隣りの客がまさに潤日生まれ。派手はでの服にちゃらちゃらとした装飾品、ヤクザではないが明らかにチンピラ風。がっかりして、その後はあまりその事を言わなくなった。

父繁は大正14年生まれ職を転々としうまくいったりいかなかったり。徴兵検査、乙種合格で補充兵として徴兵され、中支からフィリピンへ。終戦はフィリピンのミンダナオ島で迎えている。捕虜として護送された時、住民からトマトをぶつけられた話、収容所では黒人兵に痛め付けられ、十字架を胸にしていた兵士からは煙草の吸いかけをよく投げてもらったと言う話をかれこれ10回は聞かされた。オーストラリア兵が撃った銃弾が左腕を貫通した傷跡をよく見せられた。戦後十数年して政府から木杯が贈られた。その時の市役所の職員

の態度に腹を立て、戦地で生きるか死ぬかの目にあった者に対する態度かと激高し市長を出せと、叫んだらしい。私が生まれた頃の父の職業は自転車屋。腕塚町7丁目で間口一間の小さな店であった。7丁目商店街の中ではあったが商店街といっても、アーケードもなく、ガス灯にそれぞれの店名を入れた看板がそれなりに列をなしていた。小さな店だが職人が1人居て殆ど彼が商売を仕切っていた。暇なときには万力にチューブを掛けて背負い投げの練習をしていた。父は昼間の仕事として自転車振興会（競輪）に席を置いていた。



最後は審判長にまで昇進した。当時の競輪のゴールは、粗末なもので、三角柱のようなものに5~6人の人が座って判定をしていた。審判長はその1番上に座って勝敗の最終決定をする。その後写真判定はすぐに採用されたようだ。ある日のレースで、父がトップで入った選手が内線突破の違反をしたということで失格の判定をした。場内が騒然となり父は警察の護衛付きで帰宅した。

この頃が1つの繁昌期で生活も安定していたようだ。しかし突然振興会の中で横領事件が発覚しそれに連座して職を追われた。職人も解雇して1人で商売を続けたがかなり苦しかったと思う。その後昭和31年逃げるようにして神戸から高知へ移住した。すべての事は懐かしい思い出として記憶にあるが、何故かその光景はモノトーンであり、セピア色に変色している。

現金収入を求めて、隣近所の子供相手に貸自転車を始めた。軒先に目覚まし時計をぶら下げて、1回1時間10~20円。それでも毎日客はあった。なかなか帰ってこない奴もいて、いつも怒っていた父。

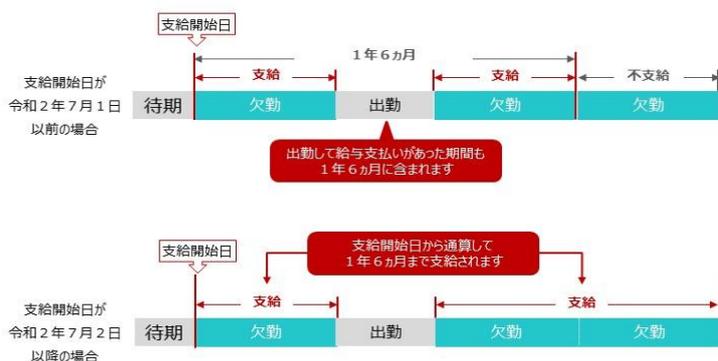
母、薫子。「かほりこ」と読む。健康ではあったが、細くか細い骨格は、今にも折れそうな感じだった。奈良の出身で、よく大和川の話の聞かされた。父との出会いの事はうやむやではあるが、母は晩年やたらと騙された、騙されたと言っていた。どう騙されたかは不明だが、まあ戦前戦後に7人の子を成しているのだから、特別仲が悪かったということでもなかったように思う。先祖には国語の先生がいたりして、神楽歌の研究の下書き原稿など残っていた。戦中は何かと苦勞したらしく、長男の満を背負い、和子、雅子、敏子の3人の娘の手をひいて高知県香美郡、繁藤におじさんを頼って疎界しようとした時は冷たく追い帰され、路頭に迷った事があったという。この話をするときにはいつも大粒の涙を流していた。戦後復員した父は、自暴自棄の状態になり、飲むうつ買うと荒れに荒れた。そんな中でも我慢に我慢を重ねて生きながらえた。

戦争の名残りが色濃く残る、昭和23年3月1日に私は、福留家の次男としてこの世に生を受けた。わがまま勝手ではあったが朗らかな父と、とびっきり優しい母に育てられ何とか戦後を乗り切った。貧しさも我が家だけでなく社会全体が貧しくその日暮らしてであった。復興の槌音はか細くあてにならず、世界各国特にアメリカの援助のもと生きることに必死であった。

私が私を意識したのは、昭和25年(1950年)不思議な事に3歳の時、近所の防火用の砂で遊んでいた時、頭の中でこの日を覚えておこうと思った事があり、錯覚かも知れないが、その時からの幼い頃の思い出がしっかりと記憶されている。就学前の幼稚園時代の事もよく覚えている。昭和幼稚園。広い園庭があり遊具があり、そこで走り回っていた記憶がある。昼食は弁当、うどん、パンの3通りの繰り返し。私はうどんが苦手(今はむしろ好物)で先生に特別に申し出てパン食2回にしてもらった。ある日、花菱アチャコが、園の前の国道を通るといってみんな小旗のような物を持って見送った事があった。その時先生がうっかり私のパン食のことを忘れた。私はついうどんを口にすることになり、あっという間にうどんが食べれるようになった。要は、欠食児童のようなもので、追い詰められたら何でも食べなきゃ仕方がないような時代であった。人見知り気味で、どちらかというとおとなしい子であった。声が子供のくせに低音で俗に言うダミ声、その性もあって、余りものを言わない子供であり、目立たない子であったようだ。高知に移住する昭和31年8月までの神戸の思い出を、つれづれなるままに、書いてみようと思う。



支給期間の考え方



令和4年1月から改正健保法が施行されました。従来、支給開始日から1年6ヵ月を支給期間としていました(途中で復職し、手当金が途切れても期間は延長されません)。

しかし、改正後は「支給開始日から暦日で1年6月の計算を行い、支給日数を確定」します。

途中、復職した場合、1年6月を超えても、支給日数累計がこの日数に達するまで手当金の支給が継続します。